



新規参入

園芸

新潟県新潟市秋葉区

田村 徹也 さん（新潟県出身）

志歩 さん（新潟県出身）

農業に興味を持ったきっかけについて

新潟県新潟市秋葉区で、柿の生産を中心に就農されている就農4年目の田村さんご夫婦にお話を伺いました。

- 今日よろしくお願いします。さっそくですが、幼少期からの農業との関わりをお伺いできますでしょうか。

（徹也さん）

実は、私も妻も非農家出身で、農業とは縁遠い家庭に育ちました。私の場合は、祖父母が家庭菜園の延長のような形で柿の木を7本所有しており、柿の出荷を行っていた時期がありました。ただ、私の両親は農作業を行っていませんでしたし、私自身も小さいころは農業にあまり関心が無く、祖父母の手伝いもほとんど行っていませんでした。小さいころは虫も苦手でしたし、外に出ることもあまり好きでは無かったので、そういったことも興味や関心が少ない要因だったのかもしれません。

（志歩さん）

私も新潟市内の出身なのですが、幼少期は農業にはほとんど触れていませんでした。大学も農業や食に関する学科だったのですが、興味があったというよりは、縁があったので入学した、というような感じでした。今はだいぶ克服できましたが、主人と同じで私も虫が苦手だったんですよ。なので、就農して最初のころは、農作業がとても大変でした（笑）。

- なんと、お二人とも農業とは縁が遠かったんですね。そんな状態から農業に興味を持ったきっかけは何でしょうか。

(徹也さん)

きっかけは、大学入学の際に小論文を用いた入試制度を利用したことです。私が住んでいる秋葉区は昔から柿の栽培団地なのですが、小論文の題材を何にしようかと考えていた時に、ふと、自分が小さいころと比べて耕作放棄地が増えていることに気がつきました。そのことから、「地域農業」を題材にして小論文を書こうと決めました。小論文を書くにあたって柿の栽培を経験している祖母にもインタビューを行ったのですが、祖母からは、両親は農業を継がないので、柿の栽培は自分で最後にするつもりだ、ということを知りました。それまでは漠然と、両親が柿栽培を継ぐものだと思っていたので、とても衝撃を受けました。

- そうだったんですね。そこから、自分で農業をやるために大学を受験した、という形でしょうか。

(徹也さん)

自分がなんとかしたいとは思ったのですが、当初は自分が就農することはあまり考えていませんでした。大学に入る時点では、広く農業に関わって地域農業を盛り上げたい、という意識だったので、実際に自分で農業をしたいとまでは考えていませんでした。自分が就農することを意識したのは、大学2年生くらいからです。

- なるほど。就農に気持ちが向いたきっかけは何かあるのでしょうか。

(徹也さん)

妻との出会いが大きいかもしれません。私が入学した学科は、「農業」、「ビジネス」、「食」を幅広く取り扱うのですが、授業でグループディスカッションや発表が多くありました。その中で当時はクラスメイトだった妻が、「地域のコミュニケーション」を題材とした地域活性化を取り上げていました。妻とのディスカッションの中で「農作物を作り、加工品等にして、地域のコミュニケーションを増やす」ことができるのではないかと考えました。農作物を作れば耕作放棄地は減るし、地域のコミュニケーションが増えれば地域農業が盛り上がるようになる、だんだんと就農したいと考えるようになりました。



研修等について

- 就農を決意されてから、研修などには行かれたのでしょうか。

(徹也さん)

就農の窓口として新潟県農林公社へ相談に行った際に、研修を勧められました。ただ、大学在学中は授業との兼ね合いもあり長期間研修することが難しく、一方で地域の課題は待ったなしの状態なので、それを解決するために大学卒業後はすぐに就農したいと考えていました。

そこで、地域の指導農業士さんを紹介してもらい、手伝いながら技術を教えてもらうことにしました。指導農業士さんのところへは大学2年生のときから少しずつ通いだしたのですが、メインは大学4年生の夏休みに指導してもらいました。卒論の時期とも重なり大変だったのですが、自身の就農までの経緯を卒論のテーマとしていたので、農業研修と卒論用のデータ採取の両方を兼ねているような形でした。

- 卒論との両立はとても苦労されたと思います。ちなみに、奥様も農業関係の卒論に取り組まれたのでしょうか。

(志歩さん)

私は卒論のテーマとして柿の加工に取り組みました。主人の実家で収穫できた柿の加工に関する研究を行いました。元々、主人の地元一帯が柿の栽培団地であり、就農後は柿の栽培も行おうと考えていたので、そのことも見据えて取り組みました。通っていた大学には、食品系の学部もあったので、そこに協力してもらって試験や検査などを行い卒論用のデータを採取しました。

- お話をお聞きしていると、お二人からは、とても息がピッタリな印象を受けます。

(徹也さん)

私たちは大学卒業後に結婚をして夫婦で農業を行っていますが、お互いに共同経営者だと思ってやっています。そのため、自分たちがもっと成長していくために、それぞれで情報交換会に行ったりして、情報収集なども行っています。

また、最近は地域でのコミュニケーションの希薄化が問題だと考えています。農業も地域のコミュニケーションを活性化するものだと考えているので、将来的には、いろいろな人を繋いで、地域を盛り上げる手助けができればいいなと思っており、それを実現していきたいですね。

就農後のことについて

- 就農後のことについて、聞かせてもらえますでしょうか。

(徹也さん)

大学卒業後はすぐに就農しました。就農する際に農協から、同じ秋葉区内で前年まで柿を生産していた柿農地を紹介してもらったので、就農1年目から柿を収穫することができました。柿農地の面積は20aほどで柿の木は50本ほどでした。それ以外にも、畑地40aほどを借りてナスなどの野菜をローテーションしながら育てました。現在でもそうなのですが、当初から少量多品目で生産を行っていて、収穫した野菜は直売所で販売しています。また、野菜栽培と併せて、地域の耕作放棄地の畑地化を少しずつ進めています。

2021年に就農したのですが、当時はまだ新型コロナがピークのころでした。新規で就農したので新型コロナの影響はあまり分からないのですが、交流会などがほぼ無く、人脈を広げることには苦労しました。その点では、今は新型コロナが5類に移行して交流しやすくなり、よかったなと思っています。

- 就農当初は、スムーズに進めることができたのでしょうか。

(徹也さん)

元々非農家出身なので初年度は作業用の機械が無く、手作業で行うことが多くありました。ただ、まったく機械を使わなかった訳ではなく、地域の人に機械を借りながら作業を行っていました。スムーズに機械を借りることができたのは、自分がこの地域出身だということも大きいのかなと思っています。技術面についても失敗することは多かったのですが、失敗と成功を繰り返すことを楽しみながら技術を習得していった、という感じです。

一方で、行政からの支援に関して、就農後2年近く行政とやりとりしたものの、結果不採択となってしまう、資金面の補助を受けることができなかったのが苦労しました。その点については、大学時代に貯めた貯金を切り崩すことや、実家住まいなので、両親の協力も受けながら、営農活動を行いました。

- ご両親の協力が得られたのは、とても心強いですね。ご両親からは、以前から就農されることを応援されていたのでしょうか。

(徹也さん)

最初、両親に就農することを話したときは、とても驚いていました(笑)。反対される、というよりも、「なんで？」という疑問の気持ちの方が大きかったようです。両親としては、このまま担い手がいなくなり、自然と農業を辞めていくものだと考えていたようです。両親には、今後の夢や目標などについてプレゼンして納得してもらいました。もちろん、妻の両親にも説明に行きました。最終的には、自分たちの熱意が伝わったんだと思っています。

- 何をするにしても、熱意はとても大切だと思います。現在の状況についても教えてもらえますでしょうか。

(徹也さん)

今年で就農して4年目になります。今年から自前の機械を用意することができたので、規模拡大に手を付けられるようになりました。栽培面積は、管理している耕作放棄地も含めて、全体で2haほどあります。品目ごとの内訳は、柿が1ha(うち、収穫可能50a)、畑が1ha(うち、収穫可能80a)といった内訳です。初年度から面積は増えてきていますが、耕作放棄地のすべてを野菜にすると手が回らなくなる可能性があるので、なるべく果樹にしていきたいと考えています。大学でも、6次化や観光農園についても学んだので、その知識も活かせれば、と思っています。

元々、地域の耕作放棄地をどうにかしたいと思って農業を始めたので、耕作放棄地を大きく復活させていくためには、果樹の栽培に取り組む必要があると考えています。今後は、イチジクやブルーベリー、桃や栗などに取り組んで、収穫時期をずらしながら対応していきたいと考えています。



就農希望者へのメッセージ

- 貴重なお話、ありがとうございました。最後に、就農希望者へのメッセージやアドバイスをいただけますでしょうか。

(徹也さん)

これから新規就農を目指される方には、「負けるな!」ということをお伝えしたいです。自分たちも、非農家出身な上に研修もしていない、ということで、「何で君たちみたいな人が農業をやるんだ?」と言われて、あまり応援されなかったなと感じています。周りのみなさんは親心で言ってくれてたんだと思うんですが、あまりウェルカムな雰囲気ではなく、どちらかというと「やめた方がいいよ」と言われてきました。そんな中で、資金や機械が十分ではない中で周囲の声に負けずに農業を続けてきたということが、自分たちの強みだと考えています。

周りの人に相談すると、高い確率で「(農業は大変だから) やめたほうがいい」と返ってくると思います。特に、これまで実績がないようなことに挑戦する場合は理解されにくいと思いますが、負けずに頑張してほしいなと思います。

